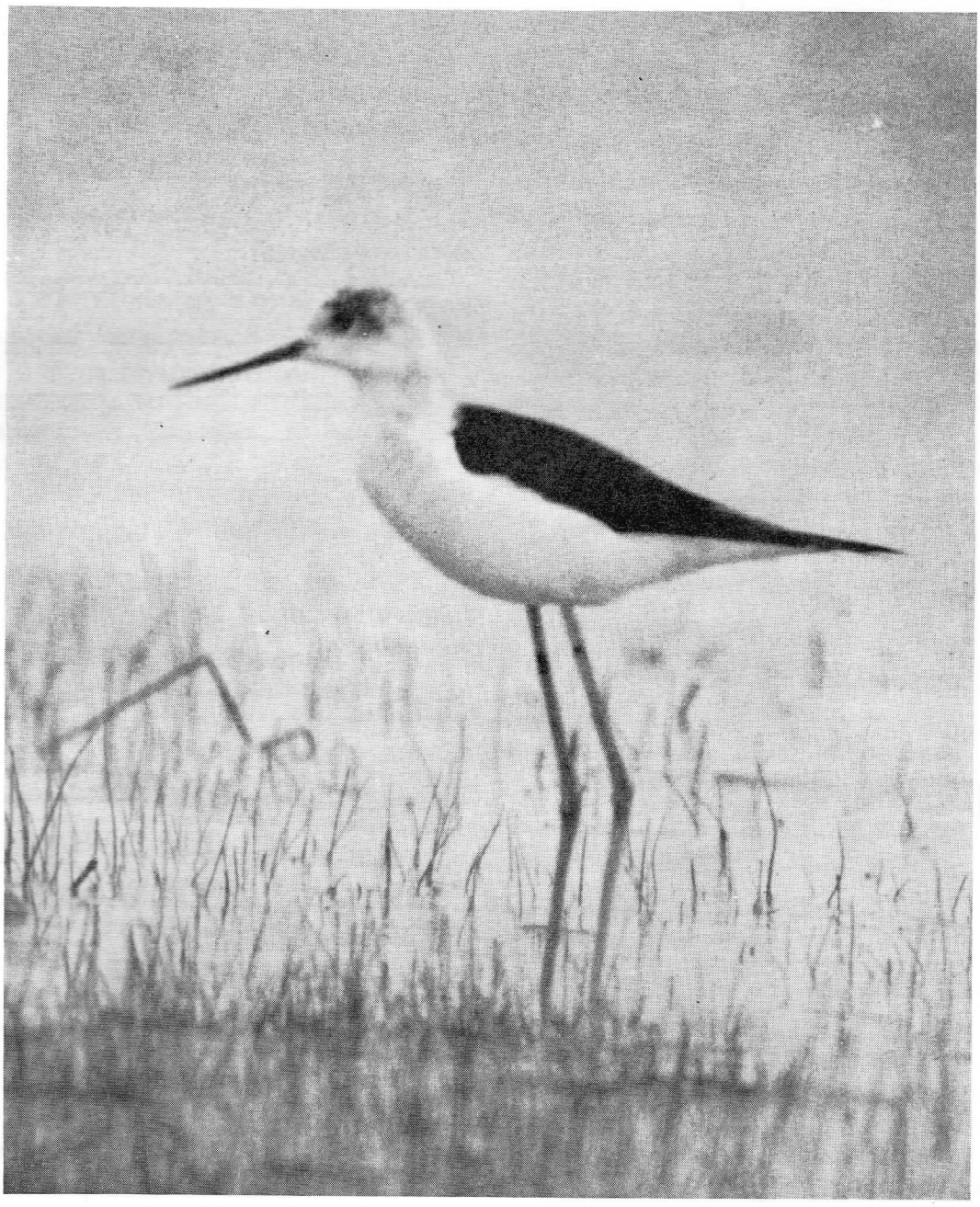
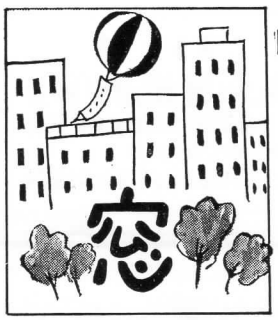
野鳥だより

—北海道—

第　21　号
編集者　北海道野鳥愛護会
発行者　北海道国土緑化推進委員会
発行日　昭和50年9月
5月・8月・11月・2月 年4回発行



セイタカシギ　　鵡川河口にて　　昭和50年5月18日　　撮影　萩　千賀



鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律施行規則の一部改正について

鳥獣の生息環境が減少し、その保護の必要性が叫ばれているとき、このたび、鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律施行規則の一部が改正され、狩猟に対する規制が一段と厳しくなり、鳥獣が保護されることとなった。その概要を紹介する。

○狩猟期間の短縮

従来まで北海道で狩猟ができる期間は、一般鳥獣は10月1日から翌年の2月15日までであったが、15日間短縮され1月31日までとなった。また毛皮獣の狩猟期間は11月15日から翌年の1月31日までであったが、これも15日間短縮され1月15日までとなった。また、道外都府県についてはそれぞれ猟期始めの15日間が短縮された。

この規制は、狩猟鳥獣の生息数の減少防止と狩猟によって発生する猟銃等による事故防止のための措置であり狩猟鳥獣別の狩猟期間は、次の表のとおりとなった。

狩猟ができる期間	狩猟鳥獣の種類	
毎年10月1日から翌年1月31日まで（道外は、毎年11月15日から翌年2月15日まで）	一般鳥獣	ゴイサギ、キジ、コウライキジ、ヤマドリ、ウズラ、エゾライチョウ、コジュケイ、オナガガモ、コガモ、ヨシガモ、マガモ、カルガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズカモ、ビロウドキンクロ、クロガモ、コオリガモ、ウミアイサ、バン、タシギ、ヤマシギ（アマミヤマシギを除く。）キジバト、ハシブトガラス ハシボソガラス、ミヤマガラス、スズメ、ニュウナイスズメ、クマ、ヒグマ、イノシシ、シマリス、ノウサギ、ノネコ、ノイヌ、ヌートリア
毎年11月15日から翌年1月15日まで（道外は12月1日から1月31日まで）	毛皮獣	アナグマ、オスイタチ、キツネ、オスジカ、タヌキ、テン（ツシマテンを除く。）ムササビ、リス

○狩猟鳥獣から除かれた鳥類

生息数の減少傾向の著しい鳥類の保護を図るため、カワアイサ、オオバン、アマミヤマシシギの3種類が狩猟鳥獣から除かれ保護されることとなった。このうち、アマミヤマシギは従来ヤマシギと同一種に分類されて狩猟鳥となっていたが、奄美大島にのみ生息するアマミヤマシギはヤマシギとは別種として日本鳥学会で分類されたための保護措置である。

○狩猟鳥獣の捕獲制限

カモ類など特定の狩猟鳥類は狩猟者が1日に捕獲できる数に制限があったが、狩猟鳥獣の生息数を維持し将来の狩猟対象とすべく、次表のとおりカモ類及びオスジカの捕獲数がさらに規制された。

狩猟鳥獣の種類	1日の捕獲制限羽（頭）数	
	改正後	改正前
キジ、コウライキジ、ヤマドリ	合計して2羽以内	左に同じ
ウズラ	5 〃	〃
コジュケイ	5 〃	〃
エゾライチョウ	2 〃	〃
オナガガモ、コガモ、ヨシガモ、マガモ、カルガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ビロウドキンクロ、クロガモ、コオリガモ	合計して5 〃（ただし、網猟をする者にあっては、狩猟期間を通じて200羽以内。）	合計して8羽以内（ただし、網猟をする者にあっては、狩猟期間を通じて500羽以内。）
バン	3羽以内	左に同じ
タシギ、ヤマシギ（アマミヤマシギを除く。）	合計して5 〃	〃
キジバト	10 〃	〃
オスジカ	1 頭	制限なし

○狩猟者の射撃訓練の義務

狩猟による事故を防止するために、乙種（空気銃以外の銃）の狩猟免許を始めてうけようとする者或いは最近4年間狩猟免許をうけていなかった者に対し、狩猟免許を受ける前に射撃場で実射訓練を行うよう義務づけたものである。

○有害鳥獣駆除の許可権限の一部が知事に移譲

特別許可としての有害鳥獣駆除等の許可権限は、本来環境庁長官の権限であるが、その一部は都道府県知事に権限が移され、事務処理されているが、今回は新たにウソ、メスジカが知事に許可権限が移り、事務処理の迅速

化が図られることとなった。許可権者別の区分は次表のとおりである。

許可権者	目　的	鳥　獣　名	捕獲方法
知　事	有害鳥獣駆除	狩猟鳥獣、トビ、ドバト、ウソ、ムクドリ、サル、ハクビシン、メスジカ	かすみ網以外の方法
		ヒヨドリ	銃器のみ
環境庁長官	有害鳥獣駆除	上記以外の鳥獣	一般的猟法
	学術研究等	すべての鳥獣	〃

○規則改正の問題点

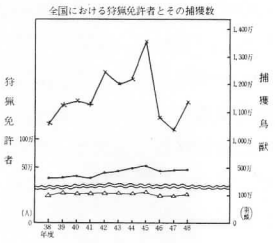
以上が施行規則の改正内容であるが、各種開発行為等により環境悪化が進み野生鳥獣の生息数が減少しているとき、これら鳥獣の保護措置が講じられたことは意義あることと一応の評価ができる。

しかし、これら規則改正によって具体的に鳥獣がどのように保護されるのか疑問点がない訳でもない。

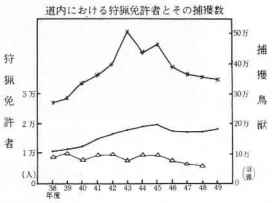
まず、狩猟期間の短縮についてであるが、15日間の期間短縮によって果して狩猟鳥獣の保護にどれほどの効果が期待できるのであろうか。とくに道内における2月1日から2月15日までの期間に捕獲される鳥獣は過去の例を見てもノウサギくらいであり、その他の鳥獣の捕獲はごく少数と言われている。

つぎに、カワアイサ等の保護或いはカモ類等の捕獲数の制限が、どのような具体的資料に基づいて検討されたのであろうか。道内での狩猟対象鳥で捕獲数が多い種類はカモ類であるが、昭和49年度に狩猟によって捕獲された数はアイサ類を含めて116千余羽であった。後で述べるように、年々カモ類の捕獲数が減少してきており、狩猟者に聞いても、いちばん捕獲が容易で成果があがる10月1日でさえ1人1日に5羽も捕獲する例はまれであるという。これは、現実に合せての捕獲制限羽数の何ものでもなく、実際上は何ら規制効果がないと言わねばならない。

次の表は全国の狩猟免許者数と捕獲鳥獣の関係を示した表であるが、この表でも明らかなように、昭和42年以降の狩猟免許者の増加傾向に対して、その捕獲数は昭和46年度以降急速に減少傾向を示している。



この傾向は道内においても同様で、狩猟者1人当たりの狩猟鳥類の年平均捕獲数は、昭和39年度24.4羽、昭和44年度22.1羽、昭和49年度19.0羽と年々減少してきている。



カモ類に限って見るともっと顕著で、道内の年平均の狩猟者1人当たり捕獲数は昭和39年度10.2羽、昭和44年度8.5羽、昭和49年度6.3羽と減少傾向が急激である。

狩猟免許者が大巾に減少し、これら狩猟鳥獣が急増することは考えられない現状で、狩猟の規制は当然の措置かもしれないが、今少し現実的に効果のある措置がとれなかったものであろうか。狩猟の統計によって狩猟鳥獣の減少傾向を知ることが出来ても、実際に個々の種類がどのくらい生息しているかその概数さえも把握されていない我国の現状で、適切な保護対策が立てられるのはいつのことであろうか。

人間による無秩序な自然環境の開発により、緑少ない荒廃した国土に作り変えられてしまった。残された数少い自然環境を保全し、野生鳥獣の生息環境を保護するための対策は、今やっと第1歩を踏み出したにすぎない。

（この施行規則の改正は、昭和50年7月5日総理府令第44号で定められ、昭和50年7月10日から施行された。）

鳥のノート（5）

土　屋　文　男

シジュウカラの巣箱

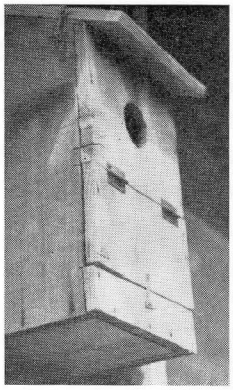
小鳥の巣箱かけには功罪の論議があって、一方的には言えない。ただし、文句なしに多く繁殖してほしい野鳥に、シジュウカラなどがあり、巣箱には、いま一つ工夫が必要な気がして、数年来、生態を調べてみた。

写真〔1〕に示めしたものは、毎年、鳥たちが利用しているが、昭和48年に、前方から観察できるようにしてある。〔2〕に見られるように、巣材は山の苔、犬の毛、家の庭の園芸植物の鉢から持ってきた水苔である。

全部の産卵が終ると、青い若葉をくわえてくるのは、何か儀式めいている。すべての卵の表面は斑は、全部、模様が違っている。そして、最終卵は少々表面が青い。「止め卵」と呼ぶ。

小鳥は3ケまでの数は、認知するが、4以上の数は数えられない。だから、1—2ケを取り去っても、1—2ケを加えても、産み足したり、余分な卵をほうり出した

りはしない。ただし、最低限3ヶにしておく必要がある。〔4〕の写真のように抱卵に入った鳥は、ちょっとやそっとの威しでは巣を離れない。しかし、これは、家のシジュウカラの場合で、どの鳥にも通用することでなく、野鳥の中には神経質なものが多いので、巣や、卵、巣箱には原則として手を触れてはならないし、法的にも、そのように定められている。

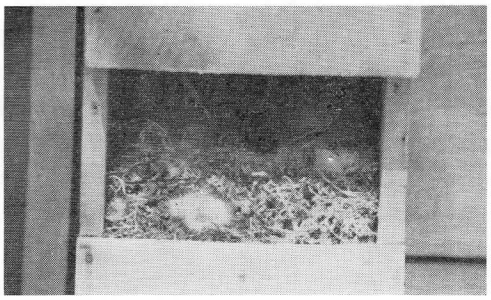


〔1〕観察用に前方に戸をつけに巣箱（コムクドリ用だが、シジュウカラが利用した。）

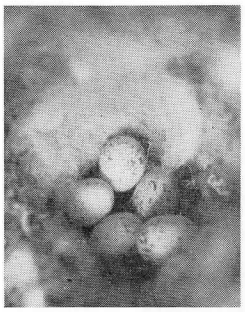
〔5〕は巣立ちも近い雛である、手を触れると、巣から飛び出すので、静かにしておく必要がある。

最近はネコを飼う家庭が、ふえたので、どの位置から見ても、ネコが掛らぬ場所に巣箱をかけておく必要がある。

シジュウカラは無精卵が少なく、育雛の上手な鳥で↗



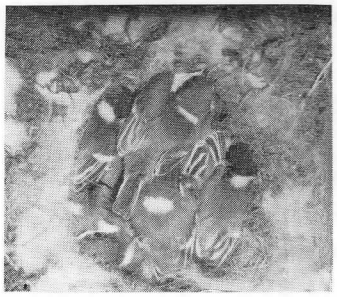
〔2〕戸を上方へ上げたところ雌のシジュウカラが抱卵している。



〔3〕シジュウカラの卵親鳥が餌を食べに出るときは、上を巣材で覆って行く。

〔4〕巣の上方から写した親鳥、尾羽根をひろげブルブルふるわせ、口をあけて人を威嚇する。

↗わが家の7ケの巣箱からは99%の雛が元気に巣立って行く。



〔5〕巣立ち直前の雛鳥たち

ヨーロッパシジュウカラは、わが国のそれより、少々大きい感じで、何処にでもいる。胸の羽毛が黄色い点、「ジュクジュク、シチピー」と2度続けて鳴く、わが国のシジュウカラより、更に一声多く、3声鳴く所はおもしろい。「一言多い」のである。

公園では人の手から餌をもらっているし、戸外のテーブルに、ケーキを置いて、ちょっと座を立ったすきに、ケーキに群がるくらい、人に馴れている点は、これが同じ鳥かと思うくらいである。　(50. 2 .12)

（本会副会長）

種類は何んでしょうか？

森　口　和　明

イスカではありません。実は嘴の奇形ハシブトガラスです。1973年1月17日函館山で発見しましたが、その後、同年5月13日に函館公園、そして今年'75年1月6日に山麓の豊川町で観察されました。今度また会う日を楽しみにしております。（函館市在住）

嘴奇形のハシブトガラス（1973年1月17日函館山にて撮影）

夕　燕

豊島博男

ゆりかもめ運河に揺られ昼の雨
青鷺の森なま臭き風溢るる
笹鳴(ささな)きや流氷去りし岬の藪
無人駅揚雲雀点となり了る
夕燕閃めき翔ける湖の宙
版画展出でて飛燕に眉截らるる
燕の巣に雛ゐてせはしバス待つ間

叙勲にあたって

井　上　元　則

筆者近影

4月29日の新聞に私が勲四等瑞宝章を賜る旨発表されるや、皆様方からお祝電・お祝辞を賜りまことにありがとうございました。大した功績もないのに私にとりましては、身に余る光栄でございます。これは多年にわたる皆様方のご指導とごべんたつのお蔭と心から深謝申し上げます。

私が小鳥に興味をもったのは、大正2年小学校5年生のときからです。そのころ函館に住んでいましたが、近所に小鳥屋ができたので、学校の帰りには立寄って、あれがマヒワで、これがイスカなどと次第に実物を見て鳥の種名を覚えました。それから野鳥にひかれて山野を歩くようになりました。

私は昭和2年に函館営林区署に配属になりましたが、道庁の指令に基づいて小鳥巣箱の実験を始めました。昭和5年「渡島地方に於ける巣箱の利用について」を北海道林業会報に発表したのが、巣箱に関する最初の実験結果であり、私は昭和7年に日本鳥学会々員となりました。

昭和9年には北海道林業試験場（野幌所在）に転勤となり、森林保護研究員となりました。昭和16年エゾミユビゲラを十勝三股で新発見し、学界を驚かせたこともあります。昭和17年実用森林生物被害防除提要を著し、昭和18年日本林学会賞（白沢賞）を授与され、昭和25年5月には農学博士の学位を受けました。

昭和22年6月「野鳥の世界（北海道の鳥）」を、昭和47年5月には「北国の自然と野鳥」を著しました。

これより先き昭和14年7月犬飼哲夫・斎藤春雄両先生とともに日本野鳥の会札幌支部を結成し、昭和35年には同会江別支部を結成しました。昭和45年北海道野鳥愛護会を結成し、現在副会長をつとめています。

探鳥会の日には作業服に身をかため、会員から千粍先生のあだ名をもらい、野鳥と共に歩むのが何より楽しみです。現在北海道栄養短大教授のほか、北方自然保護研究所を創設して理事長となり、自然環境保全ととり組んでいます。最後に口はばったい言い分ですが、満70才以上にならないと生前叙勲はないのですから、皆様方ますますお元気で長生きされんことをお祈りし、お礼の言葉といたします。　（本会副会長）

西野のキジバト

野　村　梧　郎

札幌近郊の低地林に、キジバトが帰って来るのは3月下旬のことで、私が住んでいる西野の沢にもこの時期に夏鳥の仲間のトップグループの一員として姿を見せる。

春の生気がよみがえり始めた雑木林にキジバトがやって来ると、フキのトウの浅緑が地上にも春が来たことを告げている。この時期のキジバトは落着きがなく、林の中をずいぶん広くなにかを探索しているようだが、個体によってはまだ渡りの途中のものもいるのかも知れない。

標識をつけたことはないし、なんの証拠があるわけでもないが、キジバトの独特の声が聞えるようになると、その夏、私につき合う鳥が決ったことにしている。

西野の沢も近年宅地化が進んでいるが、北1条線を延長した山の手の新道から、ほんのわづか発寒川をさかのぼった所に上水道の取水場がある。これはそれほど遠くない昔、西野の沢の人口が少なく、自然環境が良く残されていたことを、間接的に証明している。

今はもう上水道の水源として不適と思われるようになってしまった西野の沢に住むキジバトたちは、発寒川ぞいにやせ細って残されている緑地と、手稲と三角山に連なる山の林の中に住んでいる。キジバトたちが、どのようにして行動圏を決めるのかわからないが、それぞれ

のキジバトが定住する場所は、彼等なりに適当な区画割りがされているようだ。

キジバトが西野の沢に住み着くのは繁殖のためで、営巣状況を観察するには恵まれた場所だろうが、特に巣の数を数えたりしたことはない。ただ林の中を歩いていてキジバトが飛び出したので巣があることに気がついた、という形で発見した巣が二つあるが、この巣は二つとも抱卵途中で卵がなくなっている。状況証拠を検討した結果、犯人はこれも川原に営巣しているハシボソガラスと睨んでいるが確証はない。

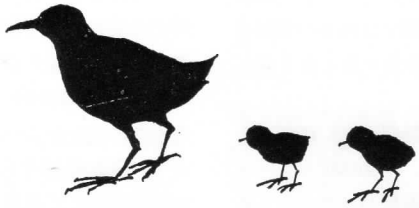
抱卵経過とヒナの育ち具合いを観察することに興味がないわけではないが、卵が盗まれた巣を見ることになるのが心配で、この事件があってからは、キジバトの巣がありそうな場所に足を向けないことにしている。「カラスにばかり文句は言えない。下からのぞけば巣材の枯枝をすかして、卵が見えるような雑な巣を作り、ナリに似合わないデカイ卵を、目立ちやすい白地のまま産むハトも悪いのだ。」とはキジバトに通じなかった文句の再録である。

8月上旬のある日の朝早く巣材を運ぶキジバトを発見した。去年切り落された枯枝の周囲を丹念に探し、小枝の切れ端をくわえて頭上の枝に止る。変な人間が見ているためか、20メートル程離れた造巣中と思われるブッシュに向わず、反対方向に50mも飛んだのは良いが、大きく円をえがいて帰って来て、巣造り中らしいブッシュの中に入ってしまった。どうにも気になる中途半端な警戒心だが、キジバトらしくて良いところかも知れない。

ところで、農家筋でのこの鳥の評判は余り良くない。農作物、特に播種期の豆類・雑穀などを狙い随分ひどい被害をもたらすことがある。毎年、何件か深刻な相談を受け、その対策に頭を悩まさねばならず、罪作りもホドホドにと頼みたくなる。

鳥獣行政という仕事の上では、キジバトに悩まされているが、この鳥を憎むことはできず隣人に抱くような好感を持っている。これはきっとキジバトが住む環境には、我々が心を許して空気を吸うことができる最少限の緑は残っているためだろう。　（道自然保護課）

☆　☆　☆



歌

三月三十日　ウトナイ探鳥日記

赤城祥子

朝早き渚は孫と二人のみ氷はとけてさざ波のよる
後のバスに友ら来たらむ美々川の注げる方にまづ双眼鏡むく
葦原に数知れず鴨の群るる見ゆレンズ押へてしまし息のむ
湖の氷の上の尾白鷲羽逆立てて風の中に立つ
潜りたるかいつぶり二羽今か今首あぐるまで待つ間の長し
沖に浮ぶ氷もなかばとけたるや脚うづめつつ白鳥歩む
湖（ウミ）に向け据ゑられしレンズに鳥の動作孫に言ひつつこもごものぞく
昨夜の予報に厚着して来ぬ湖岸（ウミギシ）の砂踏みゆくに春陽はぬくし
流れの上に組みし丸太は去年のまま朽ち傾くをおそるおそる渡る
小鳥らの囀り止まぬ榛林とはずみて来しが鴉とぶのみ
つぐみ・ひわまだ渡り来ぬか湿原の榛の木群は梢静かなり
枯葦に吹かるる羽により行きし孫はかざしぬ白鳥の翅を

短

野鳥だより

豊島博男

雪深き山の傾斜の椴林にぎんざんましこ群れて鳴き交ふ
残雪濃き比叡連峰耀けば八所神社の森に鳶舞ふ
雪晴れの庭の木立に群れ啄ばむ餌付けされたる山の小鳥ら
ターミナル天井の巣に孵りたる燕の雛の餌をねだる声
郭公の声朝毎に峡に満ち咲く際から散るアカシヤの花

セイタカシギ

萩　千賀

わが国には旅鳥として春は5月頃、秋は8月から12月頃、海岸近くの湿地、ヨシ原、干潟、水田、沼沢地に渡来する、きわめてまれな鳥である。私の記憶するところによると45年〝石狩の鳥〟というシリーズで朝日新聞にこれがのっていた。私がシギ・チドリという鳥に興味を持ち出した頃である。

脚が桃色で、いちじるしく長いので、見間違える心配はない鳥である。全長320㎜。地中海沿岸、ソ連南部、アラビア、印度、中国、蒙古、満州等に広い分布する。

50年5月11日、野鳥愛護会の小林清勇さんが鵡川河口の探鳥地でセイタカシギ1羽、サルハマシギ5羽、観察したと連絡をいただいたのが13日。私は俄に落つかなくなってしまった。思いきって14日休暇をとることにした。さっそく羽田さんに電話する。14日は折悪く強風の肌寒い日となってしまった。羽田さんは急用でこられず連絡をうけた柳沢(千)、野口、宮川さんがみえた。胸をわくわくさせていつもの牧場の観察地に急いだ。小高い丘の上からプロミナーで探すとみあたらない。もう去ったのではと…もう一度プロミナーで探すといるではないか、背の高いピンクの脚長が下をむいて右往左往して餌を求めていた。同行の皆に「いるいる」とさけび、皆でプロミナーで穴のあく程眺めたのである。この日はよほどひもじかったのだろうか。頭を上げて立っていることはなかった。一番接近できたのは30mぐらいであった。警戒心が少ないようであったのでゆっくり観察できた。採餌するさまは脚が長いので脚をキクット折っては又は片脚をぐっと後にさげたり高貴な方の挨拶をおもい出してしまった。8ミリと白黒、カラーと私にポーズをとってくれた彼に、私は十分に心ゆくまで満ち足りた気持でシャッターを押しまくった。このあとサルハマシギを再び探した。帰りぎは、遂に濃い赤褐色の鳥をみつけることが出来たが、あっちに行ったりこっちに行ったり飛んでは再びもどりせわしくて観察もなかなか思うようにできなかったが、たった1枚かろうじて判別のつく写真がとれた。

1週間たって18日、もういないだろうと前日の悪天候もこの日は晴れ、柳沢(千)さんと鵡川にむかったが様似線に不通ケ所があり、苫小牧で乗りかえ、やっと鵡川についた。いつものところは水が満々とたたえられ、私たちが平素行く探鳥地は歩けるが、対岸の牧場にはぜんぜん渡れない。

盛んにシギ・チドリが飛来してくる。無念である。手前の水の干いている箇所には腹黒のハマシギがどれだけいたであろうか。300以上もいただろうか。そのうち大きな川となっている流れの中洲に大きな鳥が降りたった。ホウロクシギであった。そのあとキョウジョシギもやってきた。

どうしても渡りたいと必死になって水面からでている牧柵をたよりに行こうとすれども中程でどうしても進むことができずバックする。仕方ないので14日歩いた方にむかう。風は強く風をよけようと突端まで行くと誰かいる。新宮さんであった。風をさけてよい場所をみつけて座って対岸をかんさつしてらした。「入口付近でハマシギの大群をみました」と。「ホウロクシギがホレあそこにいます」と対岸を指さして教えてもらう。「セイタカシギは今日はみません」と残念がってらした。水がそろそろ引く時間だとどんどん水かさがへって行く。

私達3人は入口の方にむけプロミナーでのぞきながら進むと、いたのである。3人は寒さも吹き飛び再びニコニコと笑顔をとりもどした。私は体中ゾクゾクするような嬉しさがこみあげてきた。今日は割に頭をもちあげ、立っていることが多かった。さすがスマートである。やっと胃袋も満たされ満足し落つきをとりもどしたのだろう。もう間もなくこの地を去るのじゃないかと、そのときふと思った。でも来週もまた来てみようと思った。多分その姿はみられないであろうと思いながら名残りはつきないが家路にむかった。その後、5月22日にウトナイ沼で佐藤辰夫さんが観察しています。

(道自然保護課)

鵡川探鳥会

羽田恭子

今夏のむし暑さは本州並み。それでも朝夕は、ぐっと凌ぎ易くなり、夜空にイソシギの声がきかれるようになりました。彼等の渡りが、始まっているのでしょう。その彼等を鵡川河口に訪ねました。

1週間前の台風6号の豪雨を偲ばせる泥土が、牧場一面を覆い、干潟や入り江の様子もすっかり変わって、豪雨のすさまじさを物語っていました。

牧場に入ると、すぐピッピッピッとタカブシギの声、草原から白い腰を見せて、2羽飛びだしました。先幸がよい。今日は何がいてくれるかしら、という期待で干潟を見ると、何やら、中型小型が動いています。「オグロだ」、「いや少し大きいのでは？」、「ここでは遠すぎる」などと、話しながら近づきました。私共の姿を認めてかアオサギが何羽もゆったりと舞いあがり、ウミアイサは水に潜り、カモも上空を飛んでいます。干潟には、オグロ、ソリハシ、ダイゼン、メダイ、ハマシギ、トウネン、シユビ、アオアシなど数は多くないけれど、採餌に余念がありません。身長より長いゴカイをずるずると引きずるメダイ、水浴びをしているミユビ、体で調子をとっているようなソリハシ、夏羽の黒斑を残しているハマシギ、時々飛んでは腋羽の黒を見せてくれるダイゼンなどを見ながら、昼食にしました。

右手に双眼鏡、左手はおにぎりという熱心な人もいます。午後からは牧場を横切って河口の方へ行ってみました。途中でムナグロが30羽ばかり黄金色の背を見せて採餌をしていました。泥の上に無数についた足跡、半ば乾きかけた牛糞の上には、ムナグロがつついたと思われる嘴の跡が、沢山ついています。この中に彼等のごちそうがあるのかと、半ば感心し、農作物を荒すこともせず、干潟や牛糞をつっいている彼等は、全く〝カワイイヤツ〟といえると思いました。

河口はさすが強風でしたが、その風にさからって、オグロシギの一団、11羽が白黒のコントラストも鮮かに前の干潟に降り、何処からかキヨウジョシギも3羽、橙赤色の脚を見せて干潟に降りました。きっと前に見ていた干潟は、潮が満ちてきたのでしょう。ダイゼン、トウネン、ミユビ、ハマシギなども、次々とこちらへやってきました。空にはショウドウツバメが飛び交い、チュウヒ♂も草原すれすれにV字型を見せてくれました。

どんよりとした天気のせいか、参加者は16人と少なかったのですが、プロミナーは8台あるし、雨にも降られずまずまずの探鳥会でした。

50年8月31日　9：30〜14：00　　天候　くもり

〔担当幹事〕梅木賢俊・羽田恭子

〔見れた鳥〕1．カワラヒワ　2．ハクセキレイ　3．ハシボソガラス　4．スズメ　5．ヒバリ　6．ハシブトガラス　7．トビ　8．ムクドリ　9．タカブシギ②　10．アオサギ　11．キジバト　12．ウミアイサ　13．カルガモ　14．ソリハシギ③　15．ダイゼン④　16．オグロシギ⑪　17．メダイチドリ⑱　18．ハマシギ⑥　19．トウネン⑥　20．アジサシ　21．ミユビシギ①　22．シロチドリ①　23．アオアシシギ①　24．ノビタキ　25．ムナグロ㉖　26．キヨウジョシギ③　27．ウミネコ　28．ショウドウツバメ　29．オバシギ③　30．チュウヒ♂　31．コガモ

（シギ・チドリは数を記入）

〔参加者〕藤巻裕蔵、新妻　博、新宮康生、早瀬広司、早瀬　富、小林清勇、井上元則、佐藤雄一郎、土田純一、津田新平、萩　千賀、梅木賢俊、羽田恭子、尾形研二、金沢健治、速水藤二郎　　（本会幹事・主婦）

探鳥会当日のスナップ

夏鳥の初認

◇カイツブリ
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
◇アオサギ
4. 6 野幌森林公園 柳沢信雄
◇オシドリ
4. 13 野幌森林公園 柳沢信雄
◇ウズラ
5. 24 野幌森林公園 柳沢信雄
◇イソシギ
4. 16 美唄市 藤巻裕蔵
4. 23 札幌市真駒内 新妻 博
◇ヤマシギ
4. 13 幌延町栄の沢 富士元寿彦
4. 24 弟子屈町川湯 百武 充
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
5. 5 札幌市真駒内 新妻 博
◇オオジシギ
4. 20 野幌森林公園 柳沢信雄
4. 20 弟子屈町川湯 百武 充
（ディスプレイは 4. 27）
4. 21 札幌市福移 羽田恭子
4. 24 札幌市真駒内 新妻 博
◇キジバト
4. 3 弟子屈町川湯 百武 充
4. 6 野幌森林公園 柳沢信雄
4. 7 札幌市福移 羽田恭子
4. 11 幌延町栄の沢 富士元寿彦
4. 15 札幌市真駒内 新妻 博
◇アオバト
6. 1 野幌森林公園 柳沢信雄
6. 1 札幌市界川町 平井さち子
6. 9 幌延町栄の沢 富士元寿彦
◇ジュウイチ
6. 2 札幌市界川町 平井さち子
◇カッコウ
5. 19 札幌市円山 羽田恭子
5. 20 札幌市真駒内 新妻 博
5. 23 幌延町栄の沢 富士元寿彦
5. 24 野幌森林公園 柳沢信雄
5. 25 弟子屈町川湯 百武 充
◇ツツドリ
5. 7 美唄市 藤巻裕蔵
5. 9 札幌市円山 羽田恭子
5. 11 野幌森林公園 柳沢信雄
5. 14 弟子屈町川湯 百武 充
◇ヨタカ
5. 17 札幌市真駒内 新妻 博
5. 31 札幌市界川町 平井さち子
◇ハリオアマツバメ
6. 1 野幌森林公園 柳沢信雄
6. 3 弟子屈町川湯 百武 充
◇アマツバメ
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
6. 10 弟子屈町川湯 百充 武
◇アカショウビン
5. 18 野幌森林公園 柳沢信雄
◇カワセミ
4. 28 札幌市真駒内 新妻 博
◇アリスイ
5. 1 美唄市 藤巻裕蔵
5. 3 弟子屈町川湯 百充 武
5. 11 野幌森林公園 柳沢信雄
◇ヒバリ
3. 30 札幌市真駒内 新妻 博
3. 30 美唄市 藤巻裕蔵
4. 2 弟子屈町川湯 百充 武
（さえずり 4. 5）
4. 6 野幌森林公園 柳沢信雄
4. 18 幌延町上幌延 富士元寿彦
◇イワツバメ
4. 10 弟子屈町川湯 百充 武
6. 1 野幌森林公園 柳沢信雄
◇キセキレイ
4. 9 札幌市円山 羽田恭子
6. 8 野幌森林公園 柳沢信雄
◇ハクセキレイ
4. 1 札幌市真駒内 新妻 博
4. 13 野幌森林公園 柳沢信雄
◇ビンズイ
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
5. 4 弟子屈町川湯 百武 充
5. 19 広島町島松 新妻 博
◇モズ
4. 6 野幌森林公園 柳沢信雄
4. 10 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
4. 12 ♂弟子屈町川湯 百武 充
4. 21 ♀弟子屈町川湯 百武 充
4. 15 札幌市真駒内 新妻 博
◇アカモズ
6. 8 野幌森林公園 柳沢信雄
◇コマドリ
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
◇ノゴマ
5. 15 札幌市白石栄通 柳沢信雄
◇コルリ
5. 2 札幌市円山 羽田恭子
5. 9 札幌市真駒内 新妻 博
5. 14 弟子屈町川湯 百武 充
6. 1 野幌森林公園 柳沢信雄
◇ルリビタキ
5. 3 野幌森林公園 柳沢信雄
◇ノビタキ
5. 3 野幌森林公園 柳沢信雄
◇トラツグミ
4. 10 札幌市円山 羽田恭子
4. 10 札幌市界川町 平井さち子
4. 20 野幌森林公園 柳沢信雄
4. 21 弟子屈町川湯 百武 充
4. 29 札幌市真駒内 新妻 博
◇クロツグミ
4. 19 札幌市円山 羽田恭子
4. 23 札幌市界川町 平井さち子
4. 28 札幌市真駒内 新妻 博
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
5. 1 美唄市 藤巻裕蔵
◇アカハラ
4. 20 弟子屈町川湯 百武 充
4. 22 札幌市円山 羽田恭子
4. 28 札幌市真駒内 新妻 博
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
◇ヤブサメ
4. 28 札幌市真駒内 新妻 博
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
5. 2 札幌市円山 羽田恭子
5. 3 弟子屈町川湯 百武 充
◇ウグイス
4. 24 幌延町南幌延 富士元寿彦
4. 28 札幌市真駒内 新妻 博
4. 29 野幌森林公園 柳沢信雄
◇エゾセンニュウ
5. 5 野幌森林公園 柳沢信雄
5. 30 幌延町 富士元寿彦
◇オオヨシキリ

5．13　美唄市　藤巻裕蔵

◇メボソムシクイ

6．5　弟子屈町川湯　百武　充（通過のみ）

6．7　札幌市真駒内　新妻　博

6．8　野幌森林公園　柳沢信雄

◇エゾムシクイ

5．3　弟子屈町川湯　百武　充

◇センダイムシクイ

4．28　札幌市真駒内　新妻　博

5．2　札幌市円山　羽田恭子

5．3　野幌森林公園　柳沢信雄

5．4　弟子屈町川湯　百武　充

5．7　美唄市　藤巻裕蔵

◇キビタキ

5．4　札幌市円山　羽田恭子

5．5　野幌森林公園　柳沢信雄

5．11　弟子屈町川湯　百充　武

5．12　札幌市真駒内　新妻　博

◇オオルリ

5．3　野幌森林公園　柳沢信雄

5．12　札幌市真駒内　新妻　博

5．14　弟子屈町川湯　百武　充

◇サメビタキ

6．8　野幌森林公園　柳沢信雄

◇コサメビタキ

5．23　弟子屈町川湯　百武　充

6．1　野幌森林公園　柳沢信雄

◇メジロ

4．28　札幌市真駒内　新妻　博

4．29　野幌森林公園　柳沢信雄

◇ホオジロ

4．15　札幌市真駒内　新妻　博

4．16　札幌市円山　羽田恭子

4．19　弟子屈町川湯　百武　充

4．29　野幌森林公園　柳沢信雄

◇ホオアカ

4．27　美唄市　藤巻裕蔵

4．29　野幌森林公園　柳沢信雄

4．29　札幌市真駒内　新妻　博

5．5　弟子屈町川湯　百武　充

◇シマアオジ

6．17　野幌森林公園　柳沢信雄

◇アオジ

4．12　札幌市真駒内　新妻　博

4．13　野幌森林公園　柳沢信雄

4．13　美唄市　藤巻裕蔵

4．14　弟子屈町川湯　百武　充

4．15　札幌市円山　羽田恭子

◇クロジ

5．1　弟子屈町川湯　百武　充（通過のみ）

5．5　野幌森林公園　柳沢信雄

◇オオジュリン

4．7　札幌市福移　羽田恭子

◇カワラヒワ

3．31　札幌市真駒内　新妻　博

4．3　美唄市　藤巻裕蔵

4．3　札幌市円山　羽田恭子

4．10　札幌市白石栄通　柳沢信雄

◇ベニマシコ

4．12　弟子屈町川湯　百武　充

4．13　野幌森林公園　柳沢信雄

4．21　札幌市福移　羽田恭子

◇イカル

4．28　札幌市真駒内　新妻　博

5．6　美唄市　藤巻裕蔵

5．9　札幌市円山　羽田恭子

5．14　弟子屈町川湯　百武　充

◇シメ

4．13　弟子屈町川湯　百武　充

◇ニュウナイスズメ

4．20　野幌森林公園　柳沢信雄

4．27　弟子屈町川湯　百武　充

5．19　広島町島松　新妻　博

◇コムクドリ

5．9　札幌市真駒内　新妻　博

5．11　野幌森林公園　柳沢信雄

5．19　弟子屈町川湯　百武　充

◇ムクドリ

3．23　弟子屈町川湯　百武　充

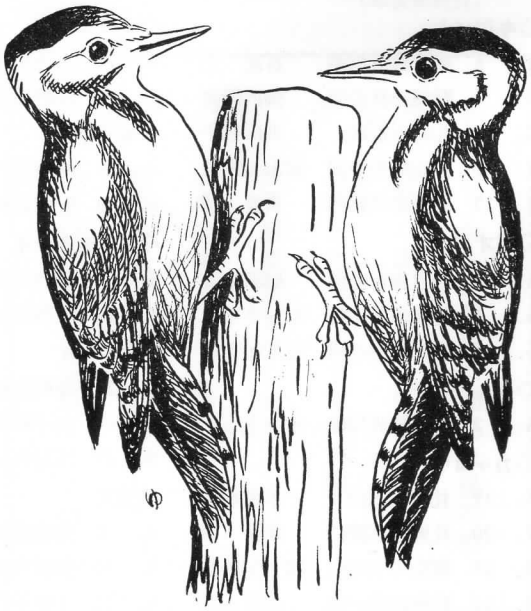
4．6　野幌森林公園　柳沢信雄

クイズ

藤巻裕蔵

2羽のアカゲラが飛んできて、枯木にとまりました。よく見ると、1羽のとまり方がどうも変です。ふだんよく野鳥観察をしている皆さんですから、どこがおかしいかすぐおわかりでしょう。答は次のとおりです。

（道林業試験場）



アカゲラは垂直ないし垂直に近い状態の木にとまるときには，足でしっかりとまり，かたい尾羽で体を支えます。ですから尾羽は必ず木に接しています。図では右のアカゲラの尾羽が木から浮かれていますが，アカゲラはこのようなとまり方はしません。アカゲラ以外の他のキツツキでも同じです。ただし水平の枝にとまるときには普通小鳥が枝にとまるような姿勢をとります。〔答〕

事務局の「曲り角」を読んで

玉　田　　誠

〝野鳥だより〟18号がやっと送付されてきた。すでに19号が発行されていなければならない程の遅れで、一体〝会はどうなったのだろう〟と心配になってきたところだったので一安心というのが本音である。事務局便りによると「本会もいろいろな意味で曲り角にさしかかっている」と記されている。また、「その曲り角を発展の機会としてとらえるべきだと思う」とも記されている。しかし、「曲り角」と感じている事実には何一つ触れていないから戸惑ってしまうのである。そこであれこれと思いを巡らして、こんなことも要因の一つではないかと、考えてもみなかった駄文を草することにした。

その一つに会費の納入が考えられる。全納されたとしても年4回の会誌の発行も楽ではないように思える。封筒なども道のものを使っている現状である。専任の職員一人おけるご身分ではなく、極端な言い方をすれば「他人の褌で角力をとってっている」ような会なのだから、せめて会費ぐらいは、おそくても年度当初に納めたいものである。このことは会員数の把握につながり、決算・予算・行事計画の立案にもつながって会の運営に大きな影響をもたらすことに思いを馳すべきである。

次は会員の地域性（地域的な偏在やバラツキ）や個人の会に対する期待のようなもののアンバランスも一因と考えられる。〝探鳥会〟なども札幌やその周辺地域の人達に恩恵があっても、道北・道南や道東の会員には無縁のものに近い。同送されてきた新しい会員名簿は待望久しいものであったから事務局の努力を多としたい。名前の消えた知人がいて寂みしい思いもしたが、久しく音信の絶えた旧知の名前を見出すことができて懐かしい思いにもかられた。さて道内の個人会員を調べてみたら、20市381名、49町82名、3村3名の計466名であった。市部では札幌市が44.2％と群を抜き、江別市がこれに次ぐが9.4％とガタ落ちである。釧路市が7.5％とはいえ第3位の座をしめ、苫小牧が第9位だが1.5％とでたのは意外であった。（％は会員数/人口×100で示すのがよいかも知れないが、これは別の意味をもつ）会員の数でとやかく言うすじ合いは毛頭ないが、札幌・釧路・苫小牧とならべると、何が暗示的なものを感じ、それぞれの特異性を考えに入れると、こういったことも一因につながるのかもしれない。私は入会するときから「探鳥会・講演会」のたぐいは縁なきものとあきらめ、4回発行される野鳥だよりに年に一度ぐらい掲載していただければ誠に結構と下手な原稿やピンボケ写真を送りつづけてきた。〝濤沸湖に憩う白鳥〟について、いささかの知見を得ていただければ「幸これに過ぎるものはない」という考えである。それにしてもすでに掲載9件「玉田の白鳥馬鹿りとりあげるな」と事務局はしかられているのではなかろうか。送稿依頼は毎号のように掲載されている。「特に新人の投稿を待つ」とも書かれている。各号12頁ではあるが1年分では48頁になり、かなり速報性も高い。これだけの会誌をもつ地方の会はそうあるまい。北海道は広いし、会員の目指しているものも多様であるように思えるが会誌への投稿は総ての会員のもつ権利のようなものであるのだから、誰かが(会)が何かしてくれるのを待つのではなく、会員の一人一人がそのおかれている立場や、その地域において行なったり、見聞したりしたことあるいは、抱えている悩みごとを報告し合って会を盛り立てていこうではないか。「北海野鳥愛護会」という会それは会員の一人一人であることを自覚して「曲り角」を切り抜け、楽しく有意義な会にしていこうではないか。

（網走市立北浜中学校）

アメリカヒドリ

森　口　和　明

昨年11月15日より青森県小湊・東京不忍の池・宮城県松島・新潟県瓢湖等水鳥の調査に行った時、16日松島海岸でヒドリガモの群の中に唯1羽だけ休んでいたのを撮影しました。

日本では30例程報告されています。渡島の大沼で昭和48年11月7日116羽のヒドリガモの群の中に1羽観察しましたが証拠写真をとる事が出来ませんでした。めずらしい鳥なのでお知らせします。　（函館市在住）

1974年11月16日撮影　松島海岸

50年度総会開催される

8月29日午後6時から札幌市中央区の北海道婦人文化会館で昭和50年度の総会が開催された。

総会の席上、昭和49年度の事業報告並びに決算報告が行なわれ、また、昭和50年度の事業計画並びに予算案についてそれぞれ承認された。

なお、昭和50年度の役員に次の方々が選出された。

会　長　犬　飼　哲　夫（北大名誉教授）
副会長　宮　脇　　恒（道造林振興協会顧問）
　　井　上　元　則（北海道栄養短大教授）
　　斎　藤　春　雄（道文化財専門委員）
　　土　屋　文　男（医師・日本鳥学会員）
参　与　清　水　保　雄（会社社長）
　　谷　口　一　芳（道森林防疫協会）
　　百　武　　充（阿寒国立公園管理事務所）
　　村　野　紀　雄（野幌森林公園事務所）
　　安　田　鎮　雄（道行政資料課）
　　渡　辺　銀次郎（札幌営林局）
　　梅　田　善　則（道自然保護課）
幹　事　小　沢　広　記（鳥獣保護員）
　　小　川　　巌（北大大学院）
　　金　田　寿　夫（円山動物園）
　　川　村　　順（道緑化推進委員会事務局長）
　　新　宮　康　生（北ガス）
　　中　田　克　道（鳥獣保護員）
　　新　妻　　博（ＨＢＣミュージック）
　　羽　田　恭　子（主婦）
　　平　井　さち子（鳥獣保護員）
　　藤　巻　裕　蔵（道林業試験場）
　　松　岡　　茂（北大大学院）
　　柳　沢　信　雄（藻岩小学校）
　　俵　　浩　三（道自然保護課）
　　野　村　梧　郎（道自然保護課）
　　岡　田　幹　夫（道自然保護課）
　　梅　木　賢　俊（道自然保護課）
　　萩　　千　賀（道自然保護課）
監　事　荳　野　寿衛吉（北電監査役）
　　佐々木　　勇（日本野鳥の会小樽支部長）

高鳴きをするモズの雌
1974年9月11日 幌延町旧水源池付近にて 富士元寿彦

＜編　集　後　記＞

☆　野鳥だより21号をお届けします。前号のたよりは発行がおくれて会員の皆さんはじめ原稿や写真を送ってくださった方々にお詫びしたばかりなのに、今回もまたまたおそくなり申し分けありません。

☆　今年度の総会は、これまでになくおくれて8月29日に開催され、このため50年度の事業のスタートがこれもまた、大幅におくれる結果となりました。

総会に先だち、7月16日午後6時から札幌市内で役員会が開催され、野鳥愛護会の運営について活発に話し合いがされました。愛護会の事業の中心は探鳥会と野鳥だよりの発行にあり、特に地方の会員にとっては野鳥だよりが唯一の楽しみなので、予定どおり発行してほしいという強い意見がだされました。

なお、編集部門を強化するため、役員の中から編集に当たる幹事4名を選出し、総会で承認されました。また、探鳥会については、担当幹事を決めて実施することとなりました。

☆　本号掲載の玉田誠さんの「事務局の曲り角を読んで」は、18号（49年5月）が発行された直後に書かれたものですが、恥をしのんであえて掲載させていただきます。

☆　遅刊につぐ遅刊のところ恐縮ですが、今年度会費未納の方はよろしくお願いします。今年度も600円ですので郵便振替（口座番号 小樽18287）をご利用ください。

野鳥だよりの原稿をお寄せください。今年の冬鳥の渡来はどうでしょうか。楽しみですね。